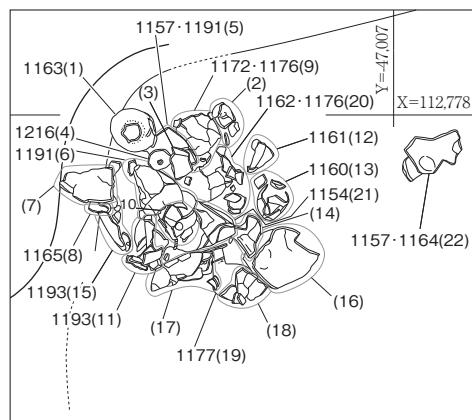
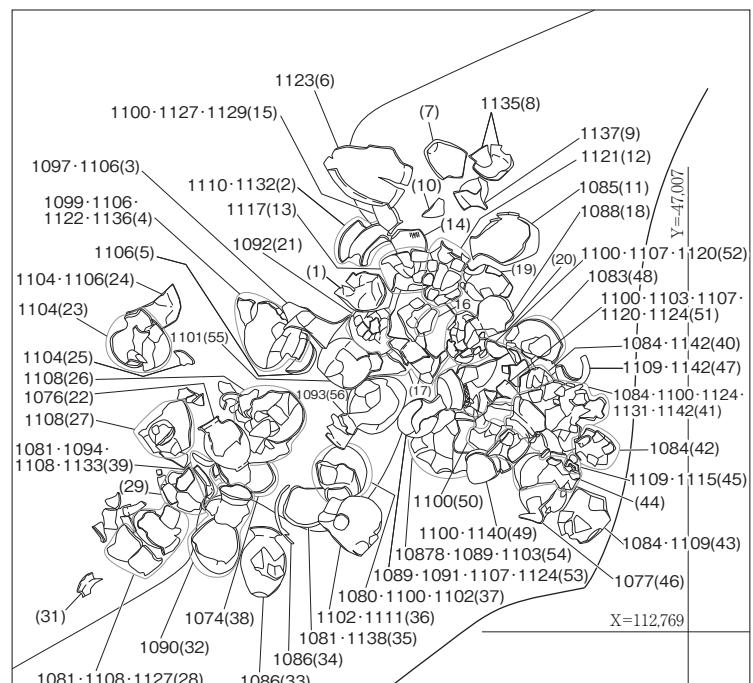


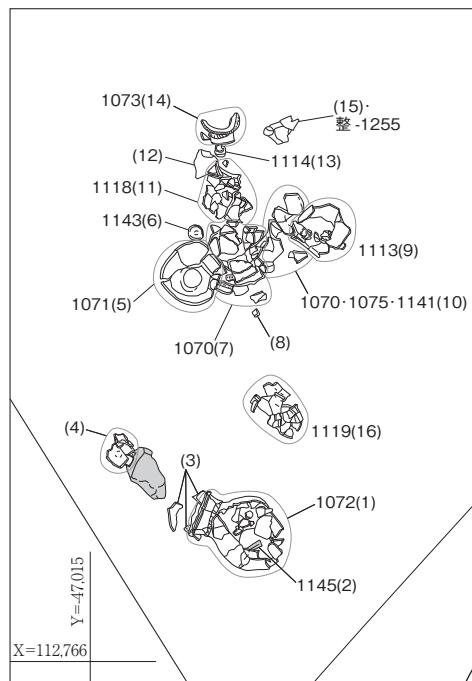
図333 SR16 断面 3



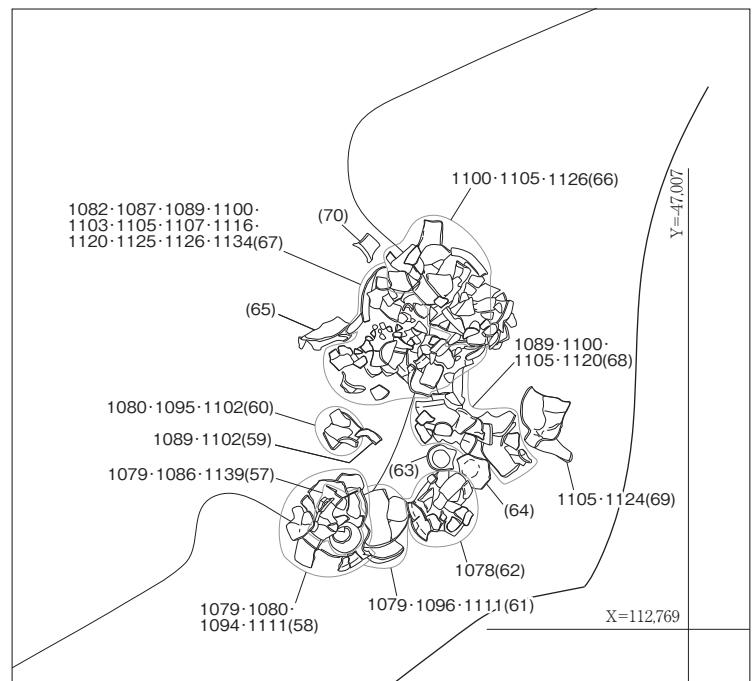
① (谷 1-N1)



② (SR3-N1)



③ (SR3-N2 (谷 1 下層))

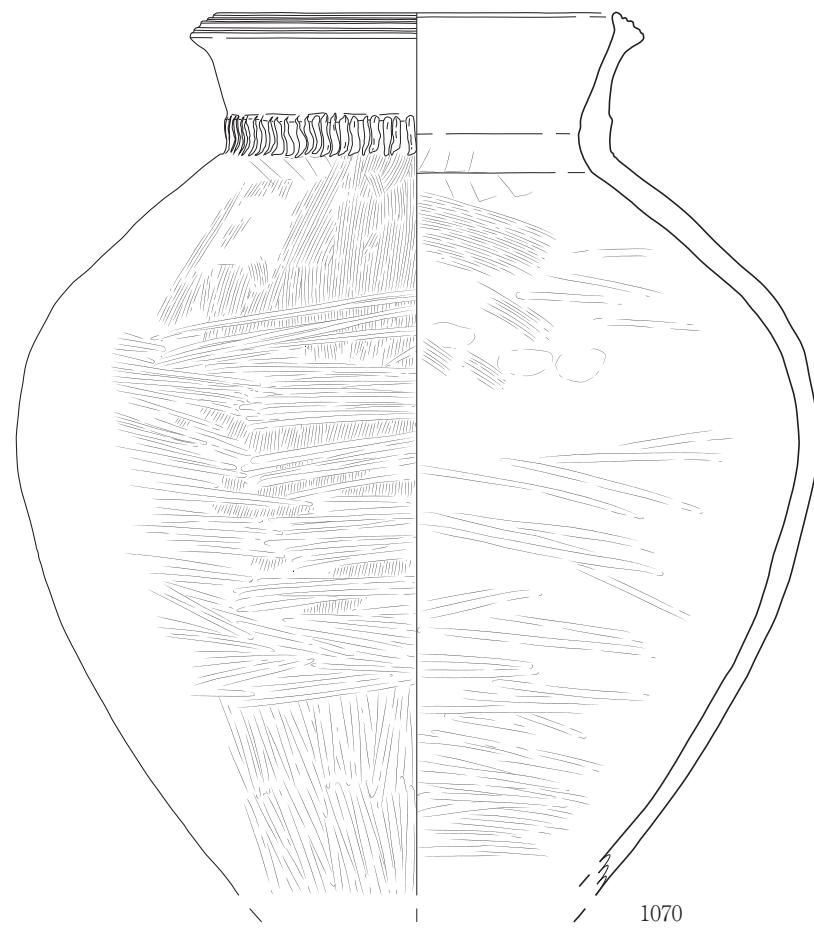


④ (SR3 下層 -N1)

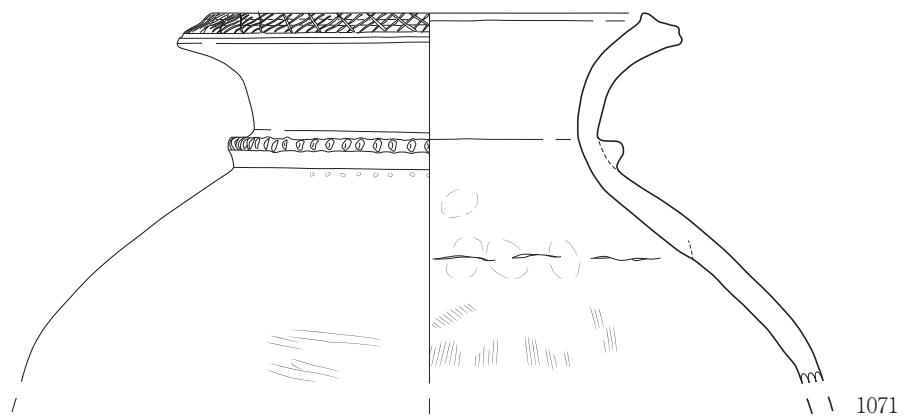
0
1m
1 : 40

図334 SR16 遺物出土状況

上層



1070



1071

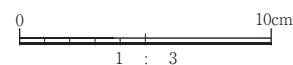
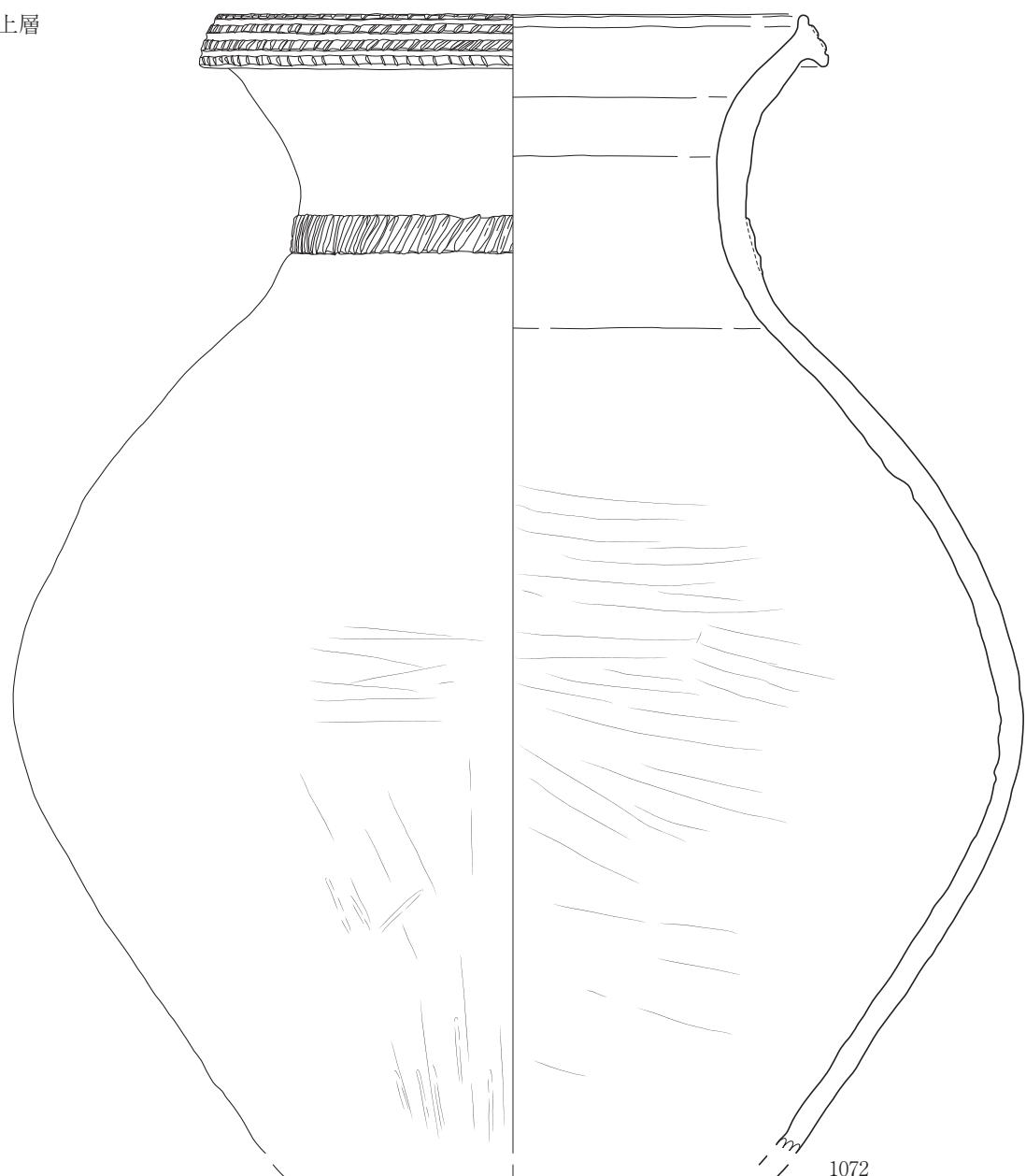
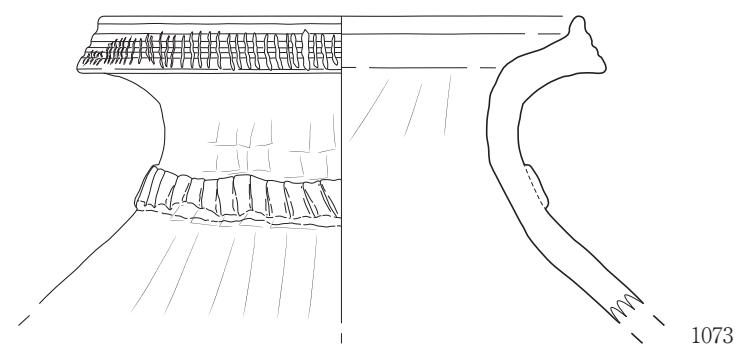


図335 SR16 出土遺物 1

上層



1072



1073

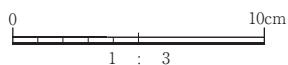


図336 SR16 出土遺物 2

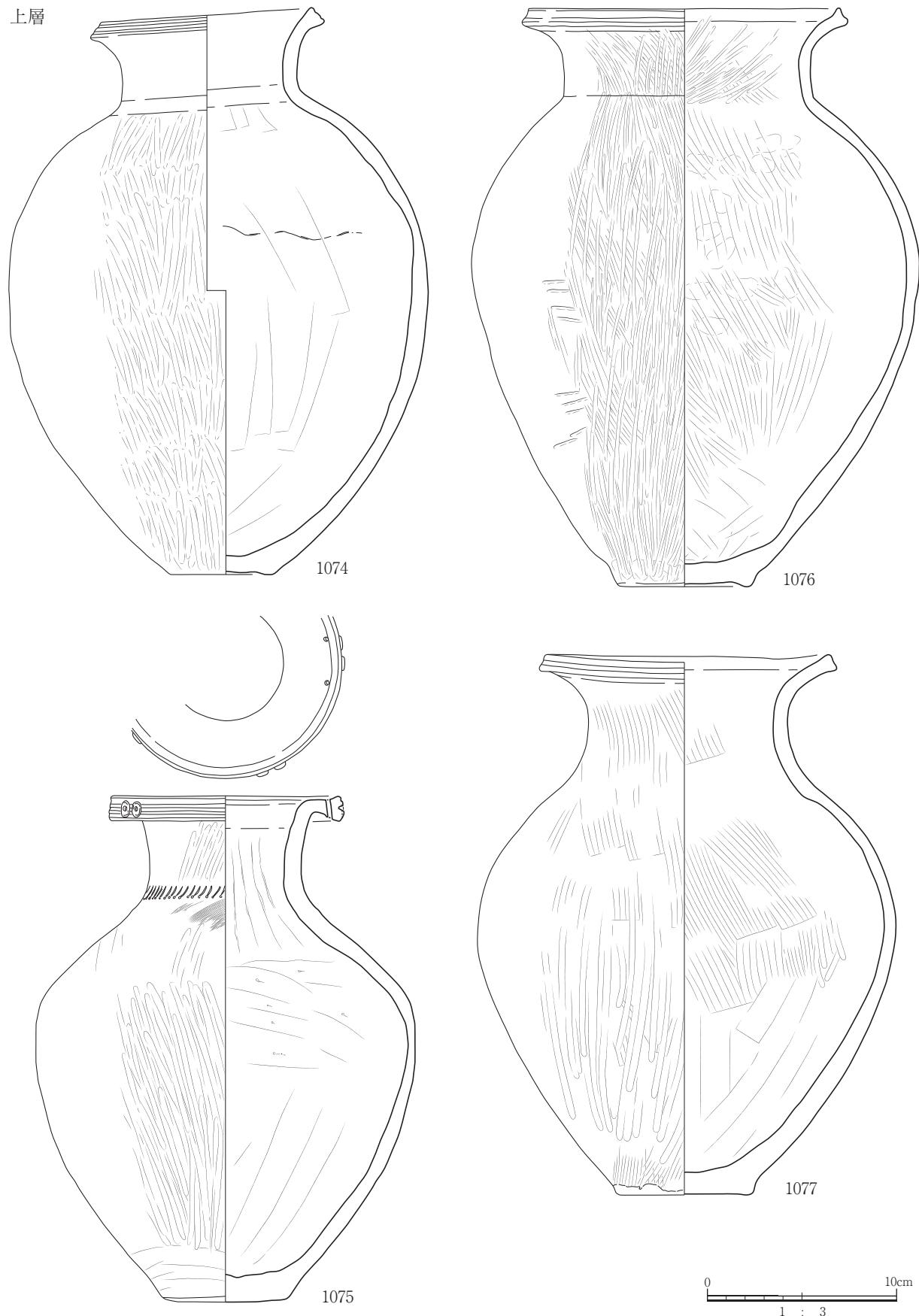


図337 SR16 出土遺物 3



図338 SR16 出土遺物 4

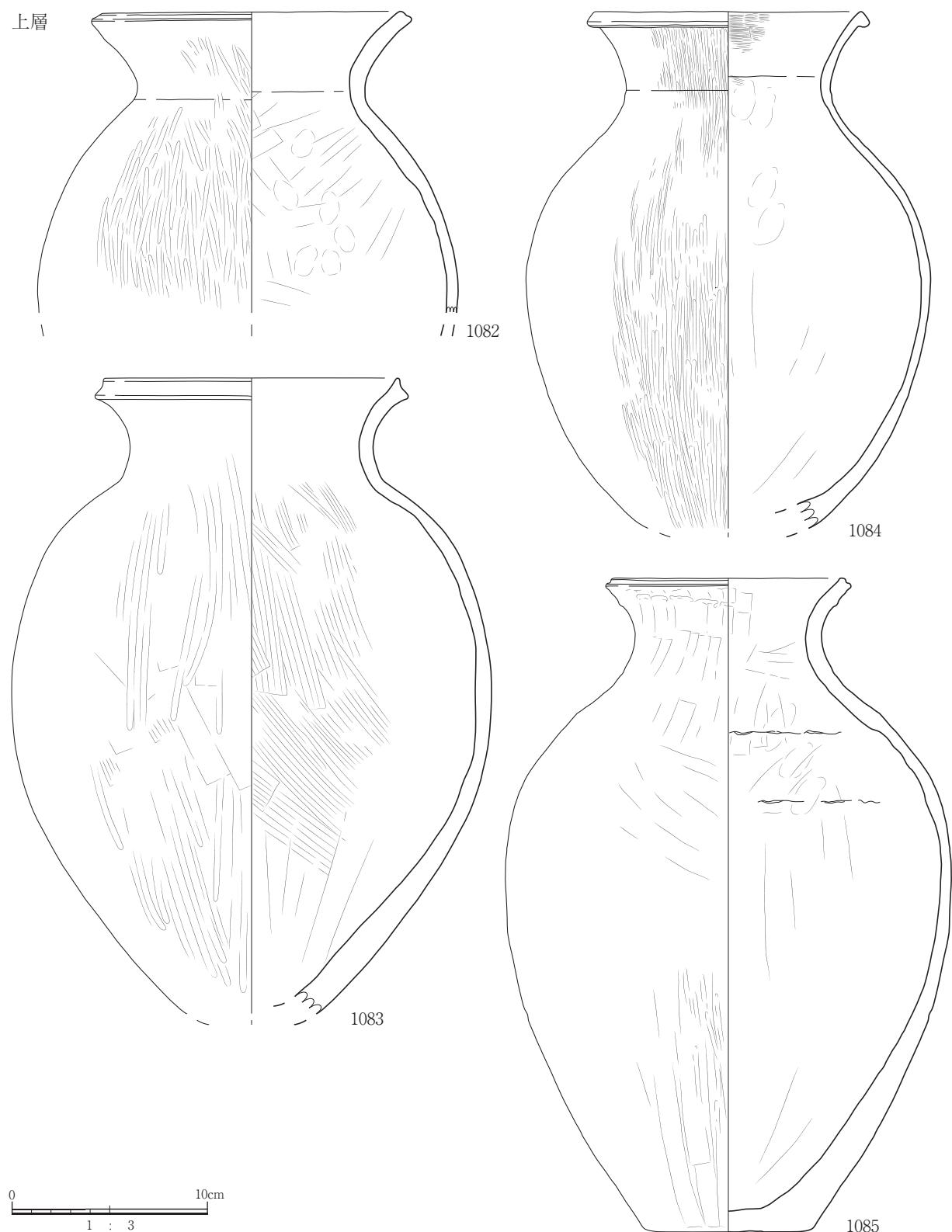


図339 SR16 出土遺物 5

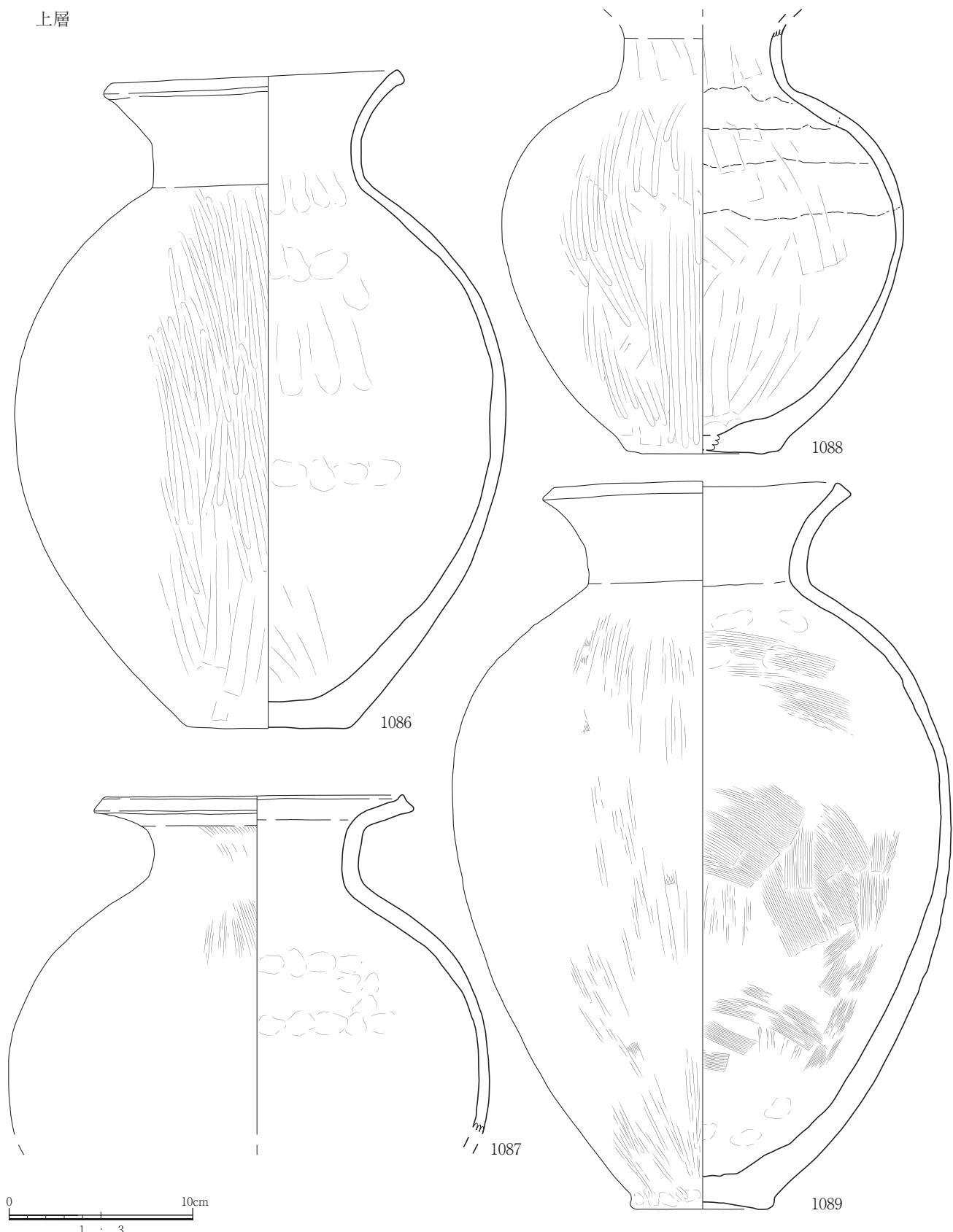


図340 SR16 出土遺物 6

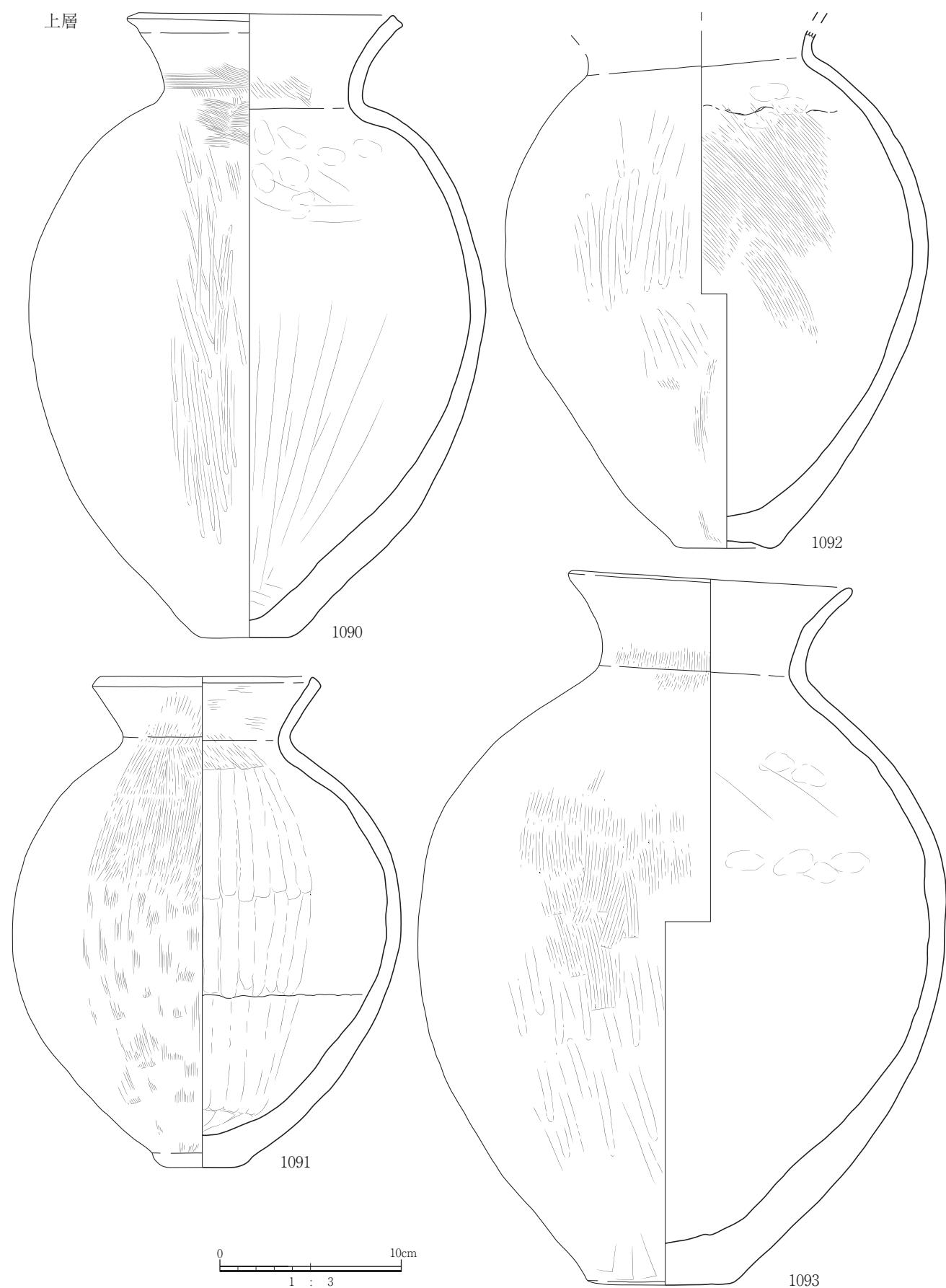


図341 SR16 出土遺物 7

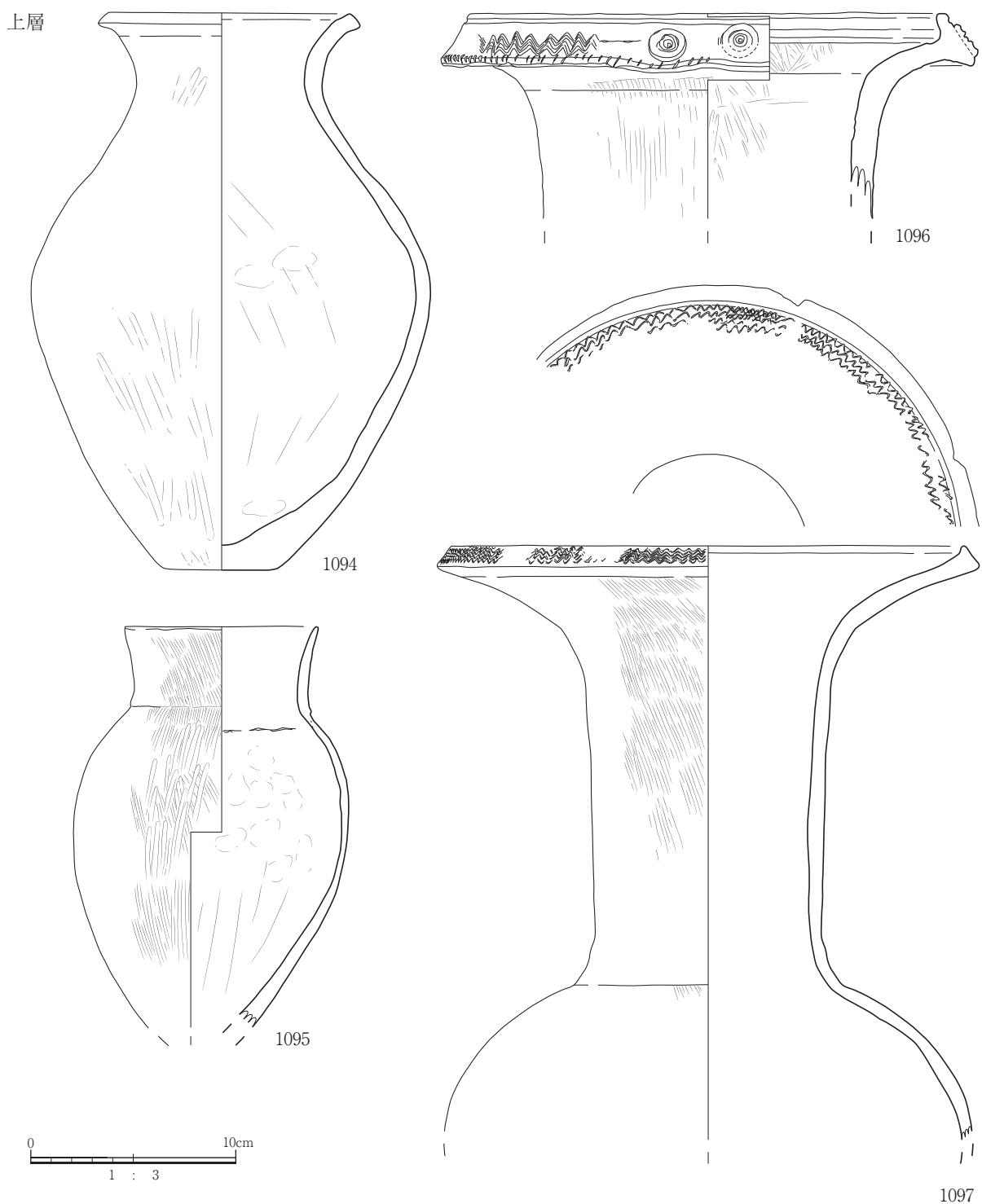


図342 SR16 出土遺物 8

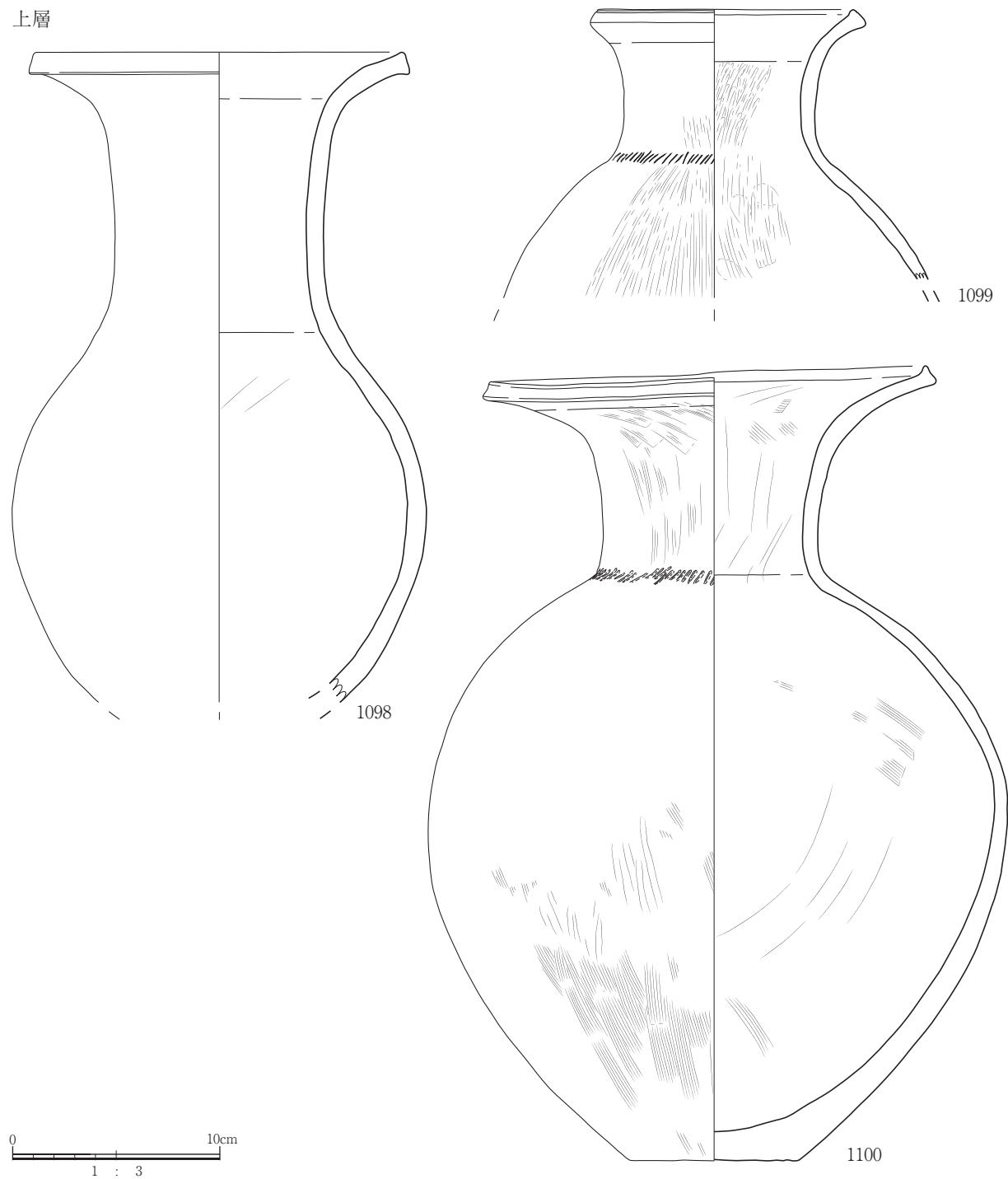


図343 SR16 出土遺物 9

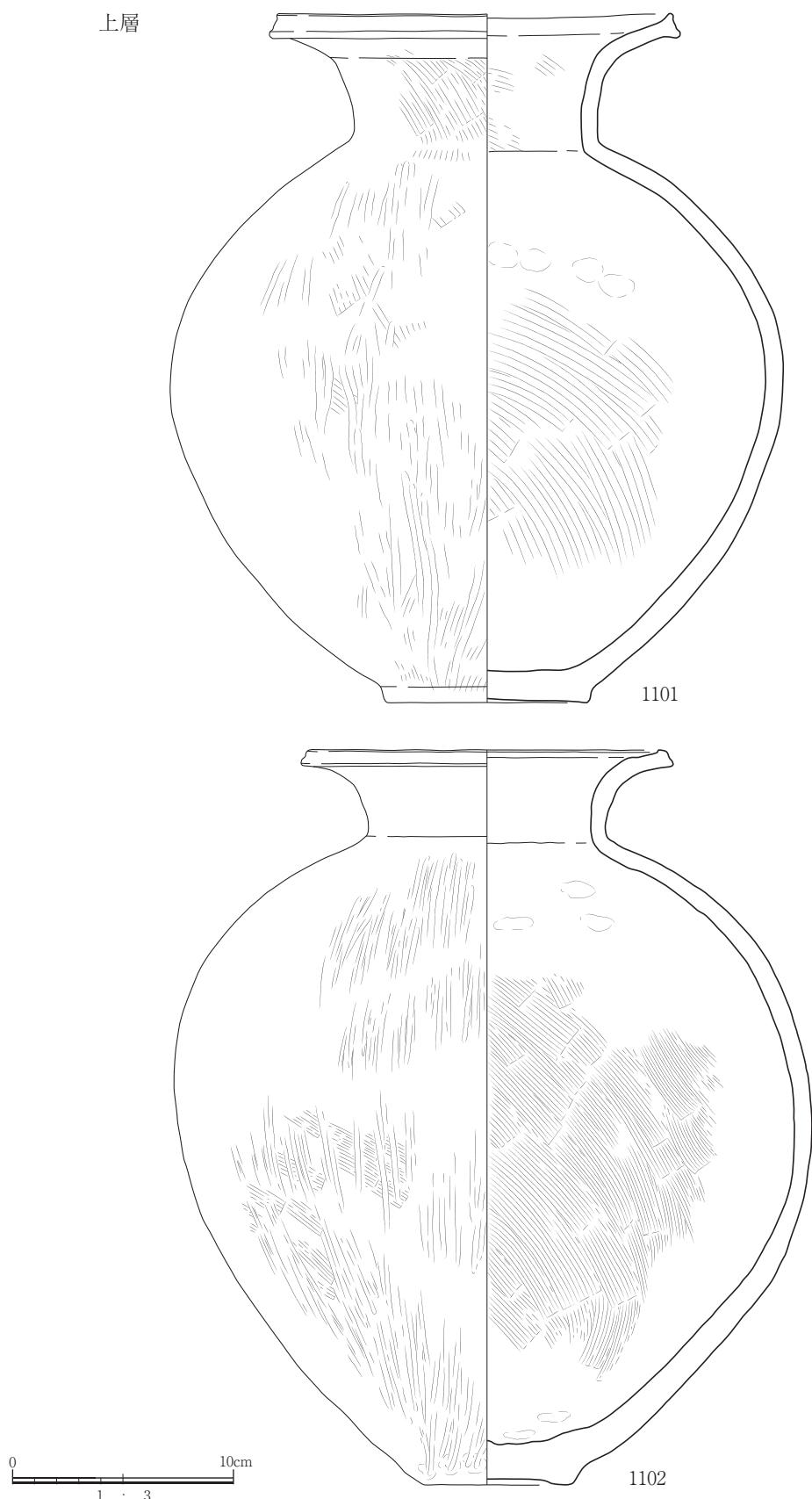


図344 SR16 出土遺物 10

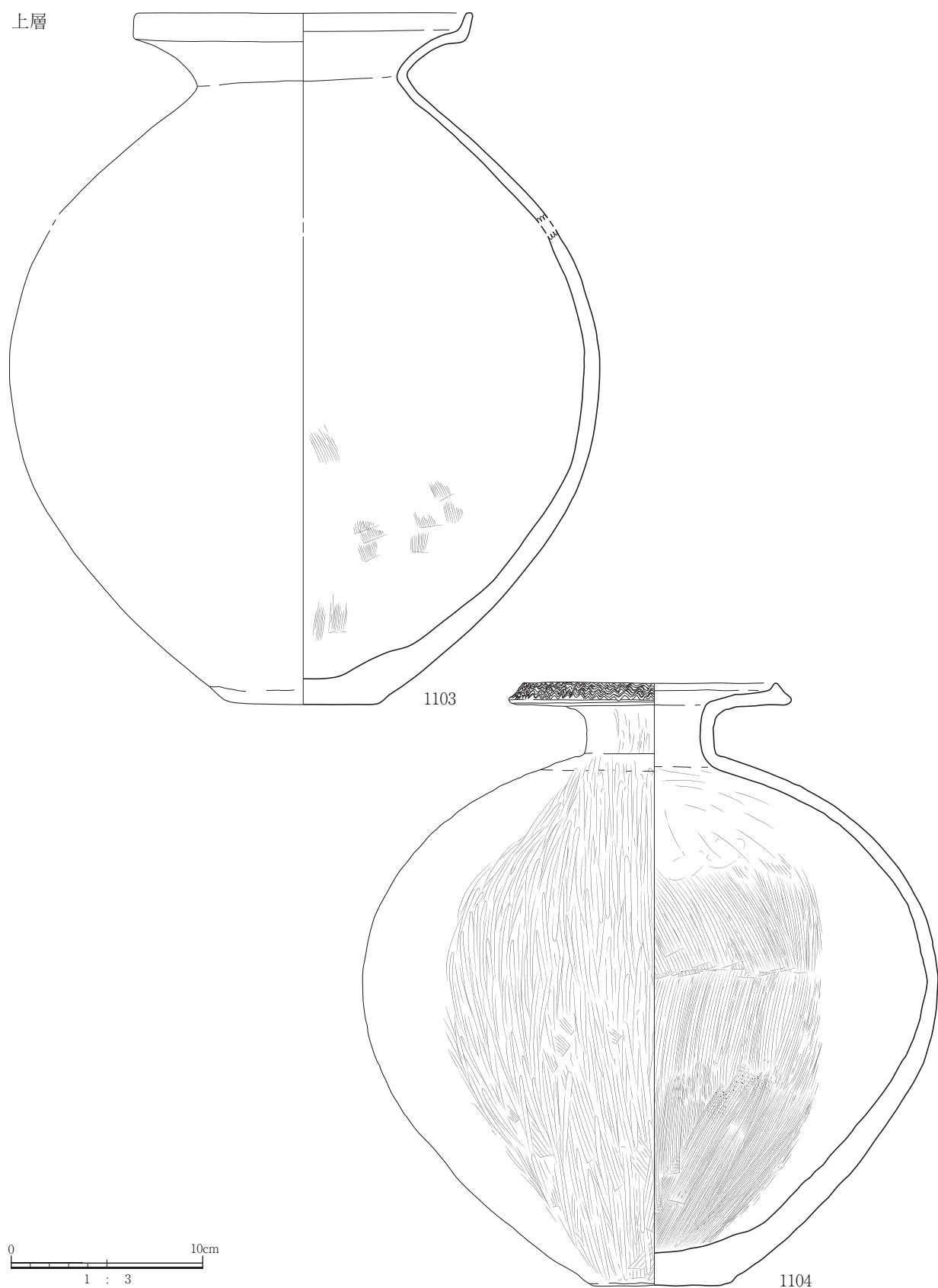


図345 SR16 出土遺物 11

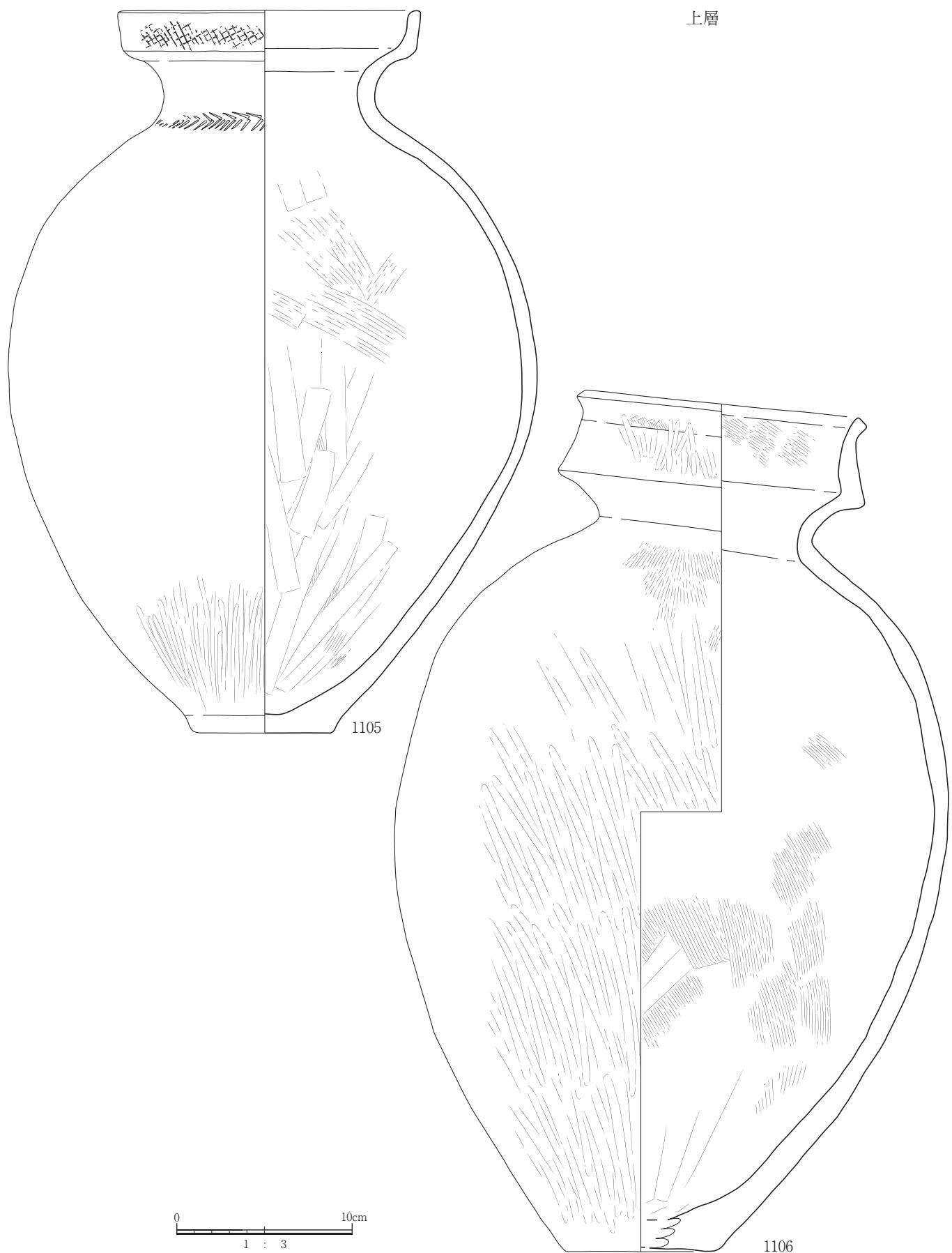


図346 SR16 出土遺物 12

1130は、胴部は細身だが、頸胴部境の屈曲は弱くなっている。1131・1132は弥生土器高杯である。1131の口縁部は杯部から強く屈曲して外に伸びる、内外面にはミガキが密に施されている。1133～1143は弥生土器鉢である。1133～1139は口縁部が胴部から強く屈曲して外に伸びるタイプである。1140～1142の口縁部は胴部から連続して形成される。1143は脚部内面に上げ底状の底部をもつ。1144は弥生土器器台である。口縁端部外面に鋸歯文と2個1組の円形浮文が施されている。

石器 1145は緑色片岩製の石棒で上下を欠損する。断面はA面右側縁部に向かってやや薄くなりなり刃部状を呈する。敲打痕は主に右側縁部に認められる。縄文時代晩期後半の同タイプの石棒に比べてサイズが大きいため、縄文時代晩期前半のものと考えられる。

1146～1233は下層から出土した遺物である。1146は広口壺の口縁部で上面に凹線文が認められる。1147・1148の頸胴部境には突帯が貼付され、1148の刻目文突帯は稚拙な仕上げとなってい

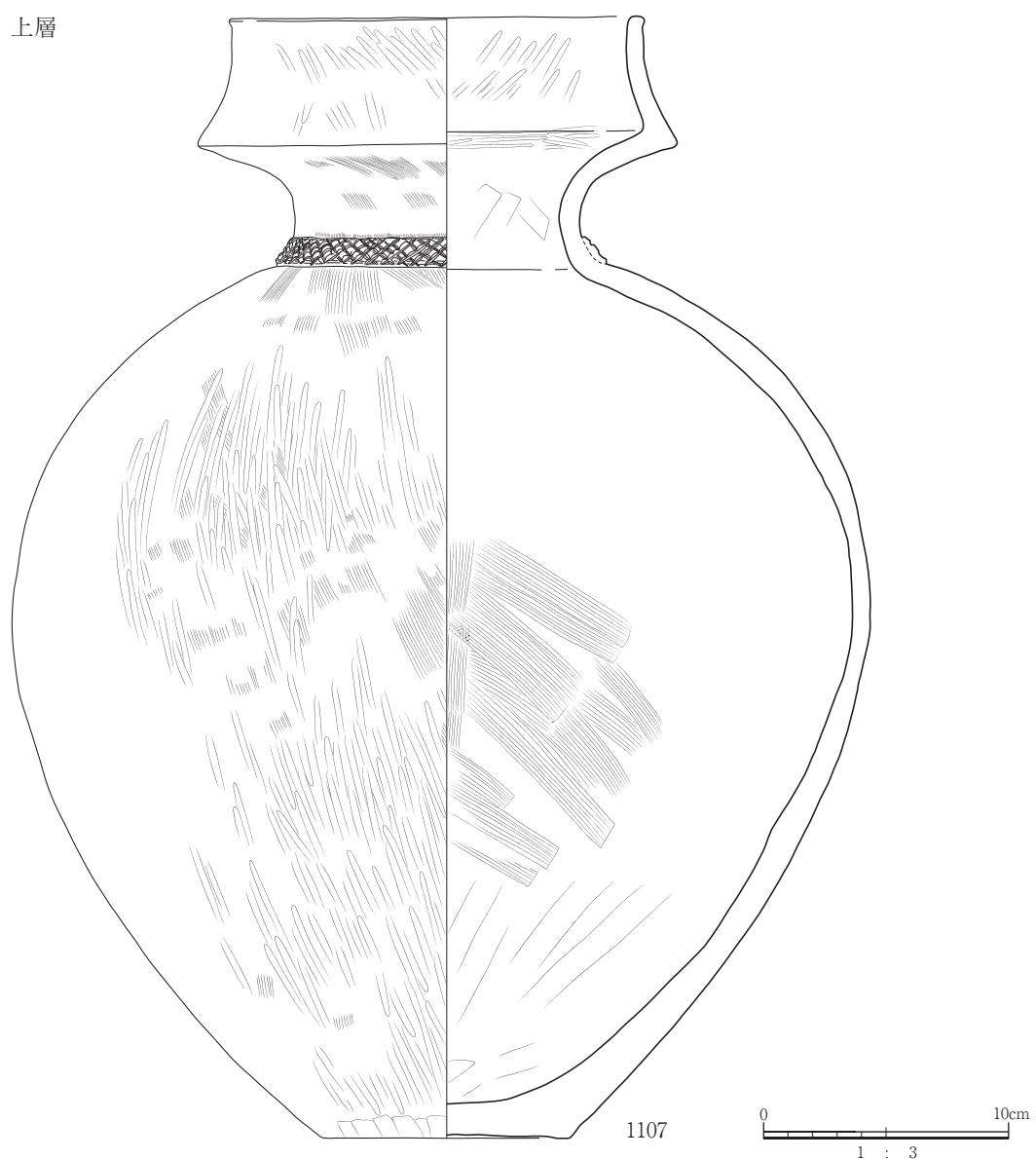


図347 SR16 出土遺物 13

る。1149・1150は口縁部形状の異なる直口壺で、いずれも口縁端部外面には明瞭な凹線文が巡る。1151は小型の広口壺である。1152は凹線文をもつ口縁端部に円形浮文と棒状浮文が交互に付されている。広口壺1154はいわゆる籠目土器で、胴部の一部に網に覆われていた痕跡が残る。口縁部片1156から推測されるのはかなり大きなサイズの壺である。1157の胴部外面全体には丁寧なミガキがおこなわれ、胴部の頸部付近には列点文が付される。1162は胴部がやや細身で口縁部が

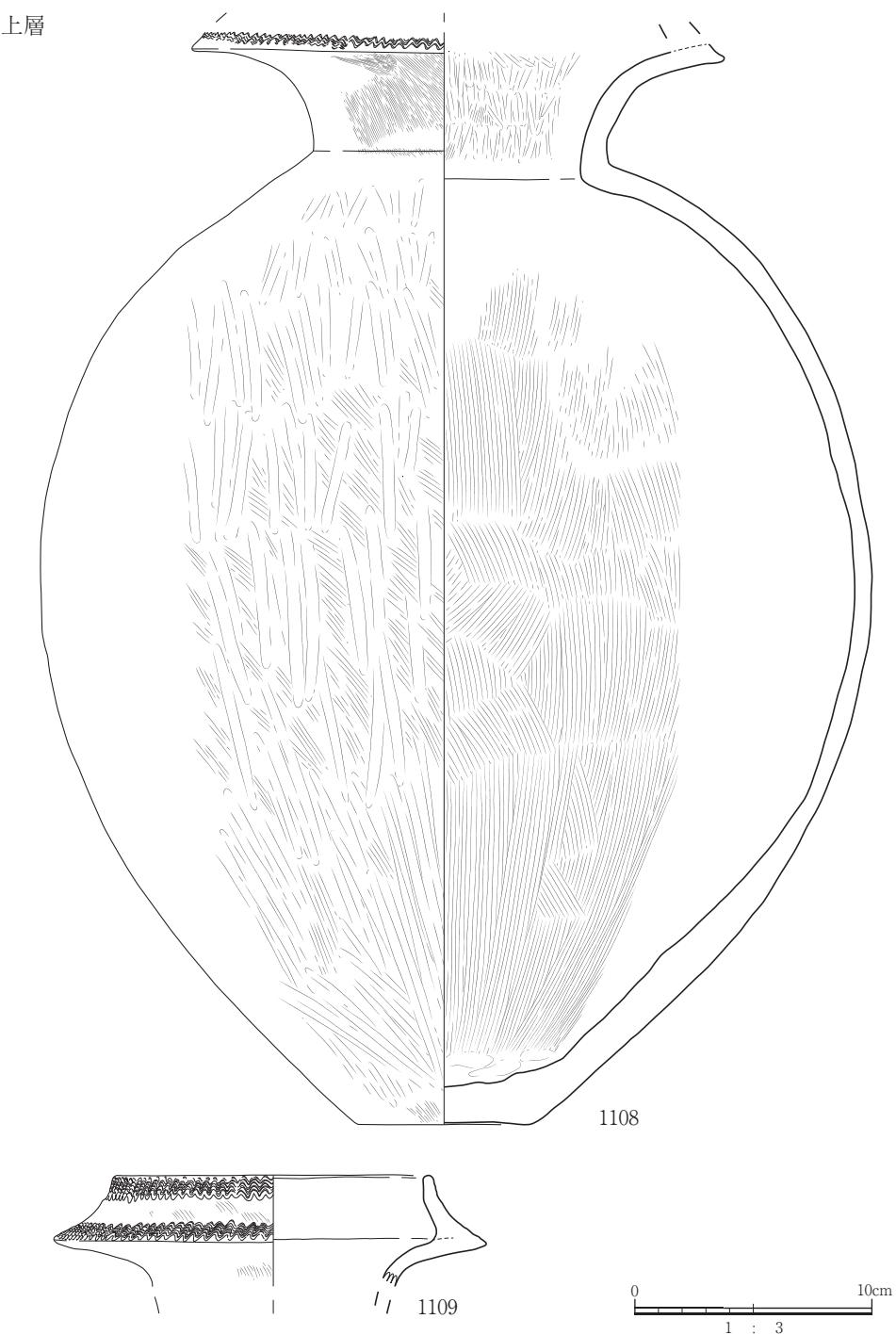


図348 SR16 出土遺物 14